

遠山郷の霜月祭

(1) はじめに

前田速夫は、古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族の「シラ信仰」というか観念について、「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）という本を書いた。私は、その本に基づいて「シラ信仰」なり「シラ」という観念について勉強を始めた。しかし、前田速夫のその「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」という本には、遠山郷の「霜月祭」がいつい述べられていない。それは、遠山郷の「霜月祭」には、「シラ」という言葉が出てこないからであろう。たしかに、遠山郷の「霜月祭」を「シラ信仰」と見なすことはよほどの検討をしないと困難であろう。

ところで、遠山郷ところは日本文化の故郷みたいなところであり、かつ、南アルプスの懐に抱かれた素晴らしい山村である。日本人なら一生のうち一度は訪れるべきところである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/touyamato.pdf>

歴史が好きで山好きの私は、遠山郷というところに特別の愛着を持っている。その遠山郷では「霜月祭」という大変奥深い祭りが行われている。そこで、私は、遠山郷の「霜月祭」が「シラ信仰」と繋がっているのかいないのか、その点についていろいろと考えてみた。

まずは、遠山郷の「霜月祭」がどのような祭なのか、それを見てみよう。

(2) 遠山郷の「霜月祭」の紹介

遠山郷の「霜月祭」の実態については、私のホームページに詳しいのでそれをまずご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/simozen.pdf>

(3) 典型的なシラの祭

① 沖縄のウヤガンやイザイホー

沖縄のウヤガンやイザイホーは、シラの祭りであり、神女（シャーマン）が地域が豊穰に恵まれるように地域の再生を祈る。すなわち、村落を祓い清め、豊饒を与えて去っていくという地域再生の儀式である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/okiizusira.pdf>

② 立山芦峯寺の布橋灌頂

立山芦峯寺の布橋灌頂は、シラ信仰と仏教が習合し、女性の救済のために、一般女性の穢れを除去し、魂の再生が行うという女性の再生の儀式である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/asikurajino.pdf>

③ 奥三河の花祭り

奥三河の花祭りは、地域再生の儀式であるとともに、還暦を迎えた人を中心に、厄年の人や恢復の見込みの無い重病人なども含めて、それらの人々の再生を図る儀式。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/okumikawa.pdf>

(4) 遠山郷の「霜月祭」の検討と解説

これから、遠山郷の「霜月祭」の検討をしながら必要な解説をするが、まず最初に結論を申し上げれば、遠山の霜月祭は、地域再生の儀式であるとともに、祭りに参加する人々の魂の穢れを祓い清めるという人々の再生を図る儀式である。

沖縄のウヤガンやイザイホーは地域再生の儀式ではあるが、祭りに参加する人々の魂の穢れを祓い清めるという人々の再生を図る儀式ではない。

立山芦峯寺の布橋灌頂は女性再生の儀式であり、男は関係ない。その点、遠山の霜月祭りは男女の区別なく誰でも参加できる。

奥三河の花祭りは、地域再生の儀式であるとともに人びとの再生を図る儀式であるが、その人びとというのは、還暦を迎えた人を中心に、厄年の人や恢復の見込みの無い重病人なども含めた特別の人たちである。その点、遠山の霜月祭りは一般の人間が誰でも参加できるのである。遠山の霜月祭は、奥三河の花祭りと酷似しているの、ひょっとしたら花祭りと同じような「シラ信仰」に基づく再生の儀式ではないかと想像しうるが、そうだと断定するにはよほどの検討が必要である。しかし、私は、「遠山の霜月祭は、地域再生の儀式であるとともに、祭りに参加する人々の魂の穢れを祓い清めるという人々の再生を図る儀式である」と断定している。

ではこれから、以下において、「遠山の霜月祭は、地域再生の儀式であるとともに、祭りに参加する人々の魂の穢れを祓い清めるという人々の再生を図る儀式である」と何を根拠に言い得るのか、その説明をしたいと思う。

① 宮田登の見解

ペンネーム「ka-onさん」の「水のごとし」という素晴らしいホームページがあって、そこに宮田登の「[ケガレの民俗誌](#)」の紹介がなされている。

<http://blog.kuruten.jp/ka-on/296584>

そのうち、[白蓋 \(びゃっかい\)](#)に関する部分を抜き書きすると、次のように書かれている。すなわち、

『 白山権現が子どもの神であるという伝承が多いのも、生まれてきた子どもを育てていく、生まれかわらせていく力が白山権現にあることを想像させる。そこで、もうひとつ注意されることは、民間神楽、たとえば三河の花祭り、あるいは備前、備中、美作などの神楽、石見の大元神楽などにみられる白蓋 (びゃっかい) または白蓋 (びゃっけ) といわれるもので、この意味については五来重も注目している。簡単にいうと、この**白蓋は神楽のシンボルであり、しかも生まれきよまることを説明する重要な意味が与えられている**。白蓋は五色の切紙を天蓋のわくにはった華麗な一種の装置といえるものである。これを、舞う場所の天井から吊した。山伏の梵天と似ているが、要するに華麗な大型の御幣のようなものである。これを中心にして人々は踊るのである。』・・・と。

白蓋（びゃっかい）は神楽のシンボルであり、しかも生まれきまることを説明する重要な意味が与えられているのである。

② 建築学的見解

山田維史（やまだただみ）の「遊卵画廊」というホームページにおいて、「夢幻能の劇構造と白山信仰私考・・信仰のこころとかたち」と題して、奥三河の花祭りの中尊寺との関係について、非常に注目すべき考察を行っている。その中から、特に私の注目すべき部分を抜き書きして、若干の説明を加えたいと思う。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamadaken.pdf>

山田維史（やまだただみ）は、「私はいま、能舞台の中央に、目には見えないが、御仏を安置した須弥壇（しゅみだん）に天蓋を架けた仏堂の中の内陣と、その前後に礼堂と後陣を想いえがく。」と言っているが、**確かに、奥三河豊根村の白山行事と同じ趣意が、中尊寺延年の古雅な舞のなかに、脈々として生きているのだと言えよう。そして、私が思うには、それらの趣旨が「遠山の霜月祭」にも脈々と生きているのではないかということだ。**

③ 岩井哲学による新見解・・・「祓い清める」ということ

神道では清浄を第一義としており、そのための儀式として「祓い清め」の儀式が基本的な儀式となっている。

具体的には、まず神社での「お祓い」が思い浮かぶ。その所作は、まず神主が「やまとことば」による「禊祓詞（みそぎはらえのことば）」を奏上して言霊（ことだま）の力によって祓い清め、さらに木の棒に麻と紙垂（しで）が結びつけられた大幣（おおぬさ）を頭の上で左右に揺り動かし、その清風によって邪気を祓う。日本の神社では、今でも毎日神主がやまとことばによる祝詞（のりと）を奏上し、また定められた日ごとに神祭が執り行われているが、一般の日常生活をみても、正月の初詣にはじまって、節分の豆まき、雛祭り、端午の節句の行事、七夕祭り、神社の夏祭りや秋祭りなど、季節ごとに「祓い清め」の儀式が行われている。

「祓い清め」という概念は世界的にみても珍しい。「祓い」とは「張る霊（はるひ）」のことで、精神がほどよく緊張した状態を表している。また「清め」とは「気蘇め（きよめ）」であり、「気が蘇る」という意味である。

「気が甦る」とは、「赤ん坊」に生まれ変わるということである。老子は、老子第五十五章で次のように述べている。すなわち、

『豊かに徳をそなえている人は、赤ん坊にたとえられる。赤ん坊は、蜂やさそり、まむし、蛇も刺したり咬んだりせず、猛獣も襲いかからず、猛禽もつかみかからない。骨は弱く筋は柔らかいのに、しっかりと拳（こぶし）を握っている。男女の交わりを知らないのに、性器が立っているのは、精気が充足しているからである。一日中泣き叫んでも声が枯れないのは、和気が充足しているからである。和の状態を心得ていることを恒常的なあり方といい、恒常的なあり方を知ることが明知という。生きることに執着（しゅうじゃく）することを妖祥（わざわい）といい、欲の心が気持ちを活動させることを頑張りという。ものごとは勢いが盛んになれば衰えに向かうのであり、このことを道にかなっていないのだ。道にかなっていないければ早く滅びる。』・・・と。

私たちは、赤ん坊から成長して大人になっていくが、その間にいろいろな欲があるしいろいろな「頑張り」がある。それが禍（わざわい）になって、精気が衰えていくのである。赤ん坊のような「モリモリする生命力」が無くなるのである。したがって、時には、「生まれ変わりの儀式」を行わなければならないのだ。

そこで哲学的に考えねばならない大変難しい問題がある。それは、「生まれ変わりの儀式」とは具体的に言ってどのような儀式かということだ。神官から「祓い清めの儀式」を受けさえすれば「生まれ変わり」が実現するのか？ そんな安易なものではないだろう。

「祓い清めの儀式」がそのまま「生まれ変わりの儀式」ということではない。やはり、「祓い清め」を受ける側の「祈り」の強さとか信仰の強さとかが関係して来る。「祓い清め」を受ける側の「祈り」がいい加減なものであっては、「生まれ変わり」は起こらない。神官を媒介として、己の「内なる神」と天にまします「外なる神」との響き合い（共鳴）が起こらなければならないのである。では、以下において、「祓い清め」の儀式によって、「生まれ変わり」が起こる条件を考えてみたい。

私は、私の論文「御霊信仰哲学に向けて」の第6章第2節で最澄とか空海とか日蓮などの名僧の祈りを「リーディングウェーブ」と呼ぶことを提案した。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/leadingwave.pdf>

今ここで、遠山郷の霜月祭との関連で重要な部分のみをピックアップすると次の通りである。

『現在の科学的知見によれば、宇宙はすべて波動の海である。そこで私はいろいろと考えた結果、「私たち人間の発する祈りというか呪力の波動は、私たちの靈魂の持つ波動特性と共鳴現象を起こして、宇宙的な存在となる。」・・・と考えている。これをこれから「祈りのプロトウェーブ」と呼ぼう。「祈りのプロトウェーブ」は、靈魂の存在を前提としている。』

『「祈り」というものは、通常、神や仏に祈るのであるが、人形や七夕飾りなどの飾り物を飾ることによって祈る場合もあるし、言の葉や音の葉によって祈る場合もある。また、歌舞伎の睨みや相撲の四股、或いは道教の禹歩（うほ）などの仕草によって祈る場合もある。しかし、根幹的なものは、やはり通常の祈り、すなわち神や仏に対する祈りであろう。したがって、以下において、説明上、「祈りのプロトウェーブ」は、神や仏に対する祈りとお考えいただきたい。』

『ここで私が問題にしているのは、宇宙的な現象であるから、地上から発する祈りというか呪力の波動は、よほど強烈なものでなければならない。プロトタイプが数多く糾合されなければならない。そのためには、最澄とか空海とか日蓮などの名僧の祈りというか「呪力」が必要である。この名僧の強烈な祈りを「リーディングウェーブ」と呼ぼう。これによって数多くのプロトタイプの波動が糾合されて非常にビッグな波動が発生する、そのようにお考えいただきたい。』

『その最終的な非常にビッグな波動を私は「ファイナルウェーブ」と呼んでいる。名僧によって最終的に形成される波動という意味である。これらはすべて宇宙に存在する靈魂を前提としており、宇宙的な現象である。名僧のリーディングタイプの呪力によって、数多くのプロトタイプの祈りが糾合されて、最終的に形成されるビッグな波動、つまりファイナルウェーブによって、宇宙の「波動の海」は穏やかになり、天変地異や疫病が解消するのである。』・・・と。

私の論文「御霊信仰哲学に向けて」の眼目は、最澄とか空海とか日蓮などの名僧の極めて強い祈りであって、私はそれを「自然呪力」と呼んでいるのだが、今ここで遠山郷の霜月祭との関連で問題なのは、そういう「自然呪力」というような強烈な呪力ではなく、通常の神社で行われている「お祓い」における神官の呪力である。

私が、「祈り」について、「プロトウェーブ」と「リーディングウェーブ」と「ファイナルウェーブ」と三つの「波動」を考える趣旨は、一つには、「祈り」というものが「波動」の神との共鳴現象であるということ、二つには、「お祓い」を受ける信者の祈りの「波動」と「お祓い」をする神官の祈りの「波動」が共鳴してより大きな「波動」となって神に届くということ、この二つのことを言いたいからである。神官というのは、遠山郷の霜月祭の場合は舞手も含むが、そういう聖なる人たちは、信者と神との間にあって、仲介役を果たすのである。したがって、信者は、神社でただ単に手を合わせて拝むだけでなく、できれば正式に神官の「お祓い」を受けた方が良い。

遠山郷の霜月祭の場合は、地元の氏子のほかに一般観光客も聖なる空間・舞殿(まいどの)入って祭そのものに参画している形になっているので、ただ単に「お祓い」を受ける信者の場合よりも、神官および舞手との共鳴(響き合い)が起こりやすくなっている。したがって、聖なる空間・舞殿(まいどの)に入る観光客の「祈り」は、神官および舞手の「祈り」と共鳴して、結構強い「ファイナルウェーブ」が神に届くのではないか。私は、そのように考えていて、遠山郷の霜月祭は「生まれ変わり」の儀式であると思うのである。

ここにおいて、私は、遠山郷の霜月祭は「生まれ変わり」の儀式であると言いきっておきたい。